Reeves Taleにみられる北方方言の要素

山　田　隆　敏*

Some Elements of Northern Dialects on Reeves Tale

Takatoshi YAMADA

And (he) seyde, 'far wel, Malin, swete wight!
The day *is come*, I may no lenger byde;
But evermo, wher so I go or ryde,
I is thyn *awen* clerk, *swa* have I seel!'
　'Now dere lemman,' quod she, 'go, far weel!
But er thou go, o thing I wol thee telle,
Whan that thou wendest homward by the melle,
Right at the entree of the dore bihinde,
Thou shalt a cake of half a busshel finde
That was y-maked of thyn owne mele,
Which that I heelp my fader for to stele.
And, gode lemman, god thee save and kepe!'
(Canterbury Tales, A.The Reves Tale, 4236 – 4247)[1]

彼は言った，「さようなら、マーリンよ、いとしい女よ！
夜が明けた，もうここにいられない。
もうどこへ行っても、
僕はおまえの恋人だ、僕は幸せもんだ！」
　彼女は言った。「いとしい男よ、さようなら！
でも行く前に、教えてあげるわ。
帰りぎわ水車小屋のそばを通ったら、
すぐ裏手の入口のところへ行ってみて、
そこに半ブッシェルのパンがあると思うわ、
あなたの粉から作ったものなの、
私も父の手助けして、盗んだものなんだけど、
では，さようなら、気をつけてね！」[2]

（ここは下種な粉屋が、学生のために、妻と娘を寝取られて、ひどい目にあう場面である。しかし、Chaucerの「生きた人間」に対する温かい表現は、その惨めさを感じさせない。北

平成3年9月30日受理　*英語英文学研究室

部方言を使う学生と、被害者の娘の使うMidland方言のまろやかさは、この場面を一転して恋を語らう場面へと一変させている。上記の本文中のイタリック体は北部方言音綴りを表わす。)

Geoffrey Chaucerは1340ないし45年頃にLondonの裕福なブドウ酒商の家に生れ、父John Chaucerともども宮廷に勤めた。詩文、音楽、礼法、馬術などの当時の一般教養を身につけた。1368年以降、王の依頼を受けてフランスやイタリアなどに派遣された。その海外留学・派遣によって、ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオなどの人物に会って、しかも彼等の作品に出会った。イタリア文芸復興期にいろいろな人物に出会った影響は、Chaucerの創作意欲をいたく刺激した。それが*Romaunt of the Rose*となり、Chaucerの詩人としての名声を決定づけることになった*Canterbury Tales*につながる。

さて、本稿では*Canterbury Tales*のReeves Taleに焦点をあて、次の三点において考察を行う。

1. East Midland Dialectに含まれるLondon Dialect
2. カンタベリー物語と家扶の話
3. 家扶の話に見られるNorthern Dialect

この三点からChaucer作品の特徴を明らかにしてゆきたい。

I. East Midland Dialectに含まれるLondon Dialect

アングロ・サクソン諸系族がまだ大陸北部に住んでいた頃、今日の北ドイツからデンマークそして南スウェーデンを舞台にして創作された、最古の英雄叙事詩*Beowulf*も、文学の啓蒙の名主King Alfred(849〜901)の編纂になる*Anglo-Saxon Chronicle*も、今日の英語から見れば、似ても似つかない英語であった。

AD. 449. Hēr Mauricius ⁊Ualentines onfēngon rice.⁊rīcsodon vii winter. ⁊on hiera dagum Hengest⁊Horsa from Wyrtġeorne ġeleapade Bretta Kyninge ġesohton Brettne on þām staþe þe is ġenemned Ypwines flēot. ærest Brettum tō fultume, ac hīe eft on hīe fuhton.(The Parker Manuscript)… Old English[3]

(In this year Mauricius and Valentinian obtain the Kingdom and reigned seven winters. In their days Hengest and Horsa, invited by Vortigern, King of the Britons, came to Britain on the shore which is called Ypwinesflet at first to help the Britons, but later they fought against them.)[4]

この英語を見ても分かるように、古代英語の特色は屈折語尾を豊富に有していることであった。その後のデンマーク語の侵入(1013〜1042)によって、屈折語尾の消失は早められレベル化されることになった。更にNorman Conquest(1066)以降、300年に及ぶノルマン王によるイギリス支配によって、フランス語とラテン語が英語に代って官用語として用いられた。それは間接的には文法形式の簡素化につながり、直接的には新しい文化の流入を物語る多数の語彙の増加につながった[5]。そして文法的には屈折語尾の著しいレベル化につながった。

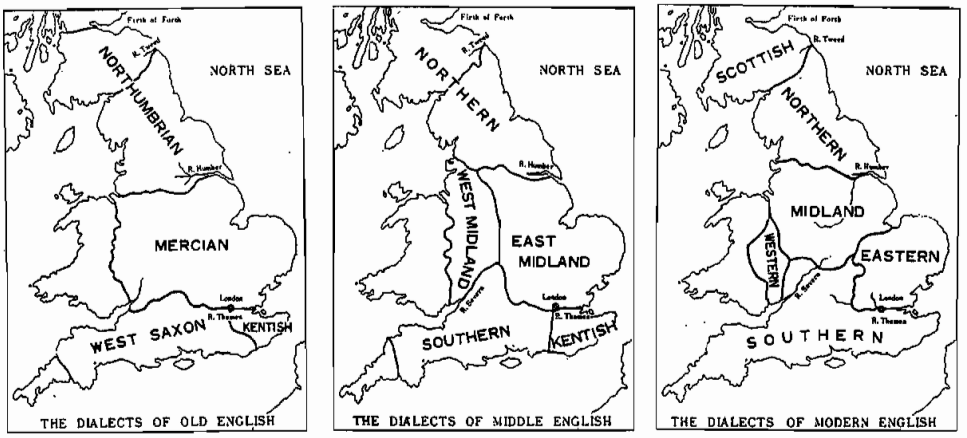
ところでGeoffrey Chaucer(?1340〜1400)の使った中世英語は、上記の古代英語による「アングロサクソン年代紀」の英文に比べて、さほど奇異の感じを今日の私達に与えない。*Canterbury Tales*のGeneral Prologueから引用する。

Whan that Aprille with his shoures sote
The droghte of Marche hath perced to the rote,

And bathed every veyne in swich licour,
Of which vertu engendred is the flour;
Whan Zephirus eek with his swete breeth
Inspired hath in every holt and heeth
The tendre croppes, and the yonge sonne
Hath in the Ram his halfe cours y-ronne,
And smale fowles maken melodye,
That slepen al the night with open yë,
(So priketh hem nature in his corages):
Than longen folk to goon on pilgrimages
(And palmers for to seken straunge strondes)
To ferne halwes, couthe in sondry londes;
And specially, from every shires ende
Of Engelond, to Caunterbury they wende,
The holy blisful matir for to seke,
That hem hath holpen, whan that they were seke.(A. Prol. 1～18)

(When April with his showers sweet with fruit the drought of March has pierced unto the root and bathed each vein with liqor that has power to generate therein and sire the flower; When Zephyr also has, with his sweet breath, quickened again, in every holt and heath, the tender shoots and buds, and the young sun into the Ram one half his course has run, and many little birds make melody that sleep through all the night with open eye — so Nature pricks them on to ramp and rage — then do folk long to go on pilgrimage, and palmers to go seeking out strange strands, to distant shrines well known in sundry lands. And specially from every shire's end of England they to Canterbury wend, the holy blessed martyr there to seek who helped them when they lay so ill and weak.)[6]

古代英語及び中世英語では殆ど同等な勢力を持った方言が各地で話されていた[7]。古代英語にはHumber河以北の 'Northumbrian', Thames河以北の 'Mercian', Thames河以南の 'West Saxon', Kent及Surrey地方には 'Kentish', Norfolk及Suffolkには 'East Anglian' と呼ぶ方言が分布していた。King Alfredの用いた英語はWest Saxon方言の標準的文語であったが長続きしなかつた。中世英語の方言にはNorthumbrianに代わる 'Northern', Mercianに代わる 'Midland', West Saxon及びKentishに代わる 'Southern' 等の方言があった。Chaucerの用いたのは、広く見れば 'East Midland Dialect', 狭くみれば 'London Dialect' で、London, Oxford, Cambridgeなど政治・文化の中心地域を占めていたから，最も勢力のある方言であった。標準英語はこの方言の発達したものとされる。



ChaucerはSpenser, Milton, Dryden, Pope, Keats, William Morris, William Shakespeareなどの後世の詩人達に影響を残した。*The Romaunt of the Rose*（ばら物語），*The Book of the Duchess*（公爵夫人の書），*The parliament of Fowls*（百鳥のつどい），*The Legend of Good Women*（善女列伝），*Troilus and Criseyde*（トロイラスとクレシダ）そして*The Canterbury Tales* などの偉大な文学的業績を残すことで高く評価されている。Spenserからは 'Dan Chaucer, well of English undefyled'，John Drydenからは 'the father of English Poetry' と賛えられた。更に彼の言語的地位は、'Lingua toscana' を用いて近代イタリア語の基礎を作ったDanteに並び称されるが、彼の偉大なところは次の2点に要約されると考えられる。①古代英語（=English of full inflection）から中世英語（=English of levelled inflection）更には普通語（後の標準英語=English of lost inflectin）にむけて言語の標準化に寄与したことである。②彼は用いた方言（=Dialect）の本質をあます所なく体得し、自由自在にこれを駆使してよくその長所を生かした。

これらの証左として、Chaucerは動詞の語尾にMidland方言の-enとSouthern方言の-sを、更に名詞の複数形にNorthern方言の-sとSouthern方言の-enを併用しているのがあげられる[8]。London方言を含めたMidland方言は南北両方言の中間に位置し、音声においても屈折語尾においても両方言の中間をとり、幾つか南北方言の特徴を取り入れている。方言が普通語となり標準となるには政治・文学・宗教・教育などの影響を併せ考慮しなければならない。

II. カンタベリー物語と家扶の話

春雨にしっとりとぬれるある季節のこと，LondonのSouthwarkのある宿屋に29人の一団が殉教者Thomas a Becketをまつる Canterbury寺院への巡礼に出かける目的で泊る。宿の主人がそのリーダー役を買って出て、往復路ともに2つずつの話をして道中を面白くしようと申し出る。このようにして巡礼者は各自競いあって得意な話を続けてゆく。一番立派な話をした者に、この宿屋で皆が費用を出しあって、夕食をご馳走することになっているからである。これは中世で盛んに行われた物語形式である。桝井迪夫氏はこの形式を次のように述べている。『ただ単に物語を並べるだけでなく、物語自体に演劇性を与え、聴衆（巡礼者・読者）の共感を得るために、つぎつぎと話されるfabliau（笑話）の中に、Chaucer独特のironyとhumour感覚をにじませ、simileとmetaphorの表現を駆使して、物語に無限の多様性と立体性を与えている。また彼は物語と物語の間にPrologue（序文）なるものを入れて話者にも性格描写を

与え、それによって物語が物語を生む興味・面白さを聴衆に与えている。』[9] 例えば、粉屋の下衆な話に対して、日頃から仲の悪い家扶はすぐさま下衆な話で仕返しをするところである。

Chaucerは宿屋の主人に「お約束どおり、どなたが先に話をなさるか、さあこれから決めましょう。さあ、籤を引かないうちは、一歩も先へ行ってはいけません。いちばん短いのを引いた方から最初にお始め下さい」と言わせる。すると、結局、どういうはずみか、偶然にも、籤は騎士に当たった。騎士はこのように言って始める。

He seyde : 'Sin I shal biginne the game,
What, welcome be the cut, a Goddes name!
Now lat us ryde, and herkneth what I seye.' (A. Prol. 853−855)
(He said : "Since I must then begin the game, why, welcome be the cut , and in God's name! Now let us ride, and hearken what I say.")

騎士の話が終ると，酔っぱらった粉屋が話を始める。それは「ある大工が下宿人のOxfordの大学生にまんまと騙されて女房を寝取られ，下衆の大工はさんざんな恥をかいて，近所の人から気違い扱いされる」といった内容である。粉屋の話が始まる前に，家扶との間で口喧嘩があったので，しかもその家扶はもと「大工」であったので彼の激怒を買うことになった。粉屋の話が巡礼の一人である家扶自身に向けられたあてこすりであると知ったので、家扶は粉屋に意趣返しを始める。それは「Cambridgeから程遠くない所に住んでいる粉屋の妻と娘が、CambridgeにあるSolar Hallという学寮から来た遊び好きの学生に寝とられる」といった内容である。家扶の話は何から何まで粉屋の話と対照的である。このCambridgeの学生は共に北部地方の生れで、北方方言を使うところに、面白味と滑稽さが感じられる。日頃はEast Midland方言、即ちLondon方言を使っているLondon在住の巡礼者達にとって、地方味の面白さを味あわせることを目的にした表現手法であろう。二人の学生に［two:］（two）を［twa：］（twa）と言わせたり、［i：am］（I am）を［i：is］（I is）又は［ik am］（ik am）と言わせたりすることで、聴衆にfabliau（笑話）の面白さを深めている。家扶の話を楽しんだ後、Londonの料理人の話へと引きつがれる。

Ⅲ. 家扶の話に見られる北方方言の要素

まず初めに北方方言の地域設定をしておくと、'Of o toun were they born, that highte Strother, fer in the north, I can nat telle where.' (A. Rv. 4014-5) となっており、北部地方には違いないのである。更にStrotherに関しては、"Strother", north. obs. app. related to OE. *strod*, marsh, the place-name *strood* (O.E.D)となっており、北部地方の方言であることは明確に示している。Allexander. J. Ellisの作成した方言区画に従うと、Division30(East Northern)−Division32(North Northern)の範囲内の方言である。

Main Textとしては*The Complete Works of Geoffrey Chaucer*(W. W. Skeat)を使用した。北方方言と他の方言を比較するため、下記の作品の用例を引用した。

○ *Cursor Mundi*(Oxford,1961)————————Northern Dialect
○ *Havelok the Dane*(Oxford,1915)————————East Midland Dialect
○ *Sir Gawayn and Green Knight*(Oxford,1969)——West Midland Dialect
○ *Piers the Plowmann*(Oxford,1969)————————West Midland Dialect
○ *Works of John Gower*(Oxford,1969)————————London Dialect.

次に家扶の話に見られる北方方言の文法的特徴を考察してみたい。

なお本稿の引用文はすべてこのスキート版を利用し、末尾の（ ）内の数字はそれぞれのファ

ブリオの行数を示す。また各章（§1～3）の最初の引用語群のイタリック体は北方方言の方言音綴りを示し、ローマン体は、それに相当する標準英語の綴りを示す。引用文中のイタリック体も北方方言の方言音綴りを示す。

§1 名詞

banes(N.)bones 4073[10] *fonne*(N.)fool 4089
lathe(N.)barn 4088 *raa*(N.) roe 4086
sale(N.)soul 4187 *sang*(N.)song 4170
saule(N.)soul 4263

1） banes［1例］ OE. ban>ME. bone(north)bane.

○ Forms : 11c.ban,baan>12c.～13c. ban>13c.～ bone, boon, bon.
>(north)13c.～19c. bane

◎ Our hors is lorn! Alayn, for goddess *banes*, (A. Rv. 4073)

banesについてOEDでは次のように説明している。

This northern word means 'the general name for each of the distinct parts which unitedly make up the skelton on hard framework of the body of vertebrate animals.'

作品内では boon,bone,bon,bones, bony が使用される。

○ We stryven as dide the houndes for the boon (A. Kn. 1177)

○ That thogh he hadde me bet on every bon, (A. WB.511)

＊他の方言に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）： *ban*(1472), *banes*(543), *bans*(6951)
- Havelok the Dane（中東部方言）： bones(1296)
- Gawain & GK.（中西部方言）： bones(424)
- Piers the Plowman（中西部方言）： bones(21)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）： bon(i.1531) bones(ii.2302)

2） Fonne［1例］. Sw.fan>ME.fone>fonn(e)

○ Forms(fon;sb.and a.obs) 15c.fone>15c.～16c. fonn(e)
(fool;sb.and a) OF.fol>13c.～14c. fol. fole>14c.～fool

◎Il-hayl, by god, Aleyn, thou is a *fonne*!(A.Rv.4089)

このfonneの語源については不明である。多分Sw.fanからの借入語でないか。fool, foolishの意味に使われた北方方言の語句である。作品内では他方言としてfool, foole, fole, などの方言音綴りが見られる。

○ Or elles he is a fool, as clerkes sayn(A.Rv.4028)

○ Oure corn is stolen, men will us fooles calle(A.Rv.4111)

○ What verray fool, thynk wel that love is fre!(A.Kn.1606)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）： fon(9186) fole(13041) foul(28) fule(12089) foles(9187) fol(20735) fole(886) etc
- Havelok the Dane（中東部方言）： fol(298,2100,307)
- Gawain & GK.（中西部方言）： fole(2414) foly(324)

- Piers the Plowman（中西部方言）：fol(12.6) fole(b.15.3) folis(b.10.6)etc.,
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：fol(i.2214) foll(i.1967) foles(iv.625)

3） lathe［1例］ ON.hlaza>Late ME.lath. now only dial.

○ Forms(lathe,sb) 16c. laythe> 16c.～17c. lath.> 19c.dial. leathe, laith.
(barn.sb) 11c. bere-ern.>12c.beren>16c.bern>17c.～barn

◎ Why nadstow pit the capul in the *lathe*?(A.Rv.4088)

このlatheはModE.barnの意味に使用されるON.hlazaよりの借入語で、今日ではWm. Yks.Lan.Der.などの北部地方で話される方言形である。作品内では他方言としてberneが使用されている。

○ As any swalwe chitteryng on a berne.(A.Mil.3258)

○ Withinne his tente, large as is a berne,(B.Mk.3759)

○ To seen hir graunges and hire bernes wyde,(B.Sh.1256)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*lathes*（4681）

4） raa［1例］ OE.raha>Late ME.raa>rae

○ Forms；11c.raha>15c～16c raa>16c～rae
>13c roa>14c～16c.ro>16c～roe

◎ I is ful wight, go waat, as is a *raa* ;(A.Rv.4086)

このraaは"A small pieces of deer inhabiting various part of Europe and Asia"の意味に使われ、「a」音を持つ北方方言形である。*Canterbury Tales*内にはraa、roe例は他になく、Chaucerの作品内ではroo、roes、roosの用例が見られる。

○ The dredful roo, the buk, the herte and hynde,(PF.195)

○ Was ful the wode; and many roes,(BD.430)

○ You liketh to haunt to roos,ye ne gon,(Bo.3.m.8.795-800)

E.D.Dによるとrae=An enclosure or cattleの意味で、north Scotland方言音と説明している。

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*ra*(19080)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：ro(iv.2786)

5） sale［1例］ OE.sawol>ME.saule>sale.sall.(Sc.)saul.

6） saule［1例］

○ Forms;11c.sawol>sawul>13c.～17c.saule>14c.～16c.sale sall (Sc.)saul
>12c.～17c.sowle>13c.～17c.soule>15c.～soul

◎ By Goddes *sale*, it sal neen other be!(A.Rv.4187)

◎ For Christes *saule*, and heer a noble game.(A.Rv.4263)

このsale、sauleは"The principle of thought and action in man, commonly regarded as an entity distinct from the body"(O.E.D)の意味に使われ、「a」音を持つ北方方言形である。作品内の他方言としてはsouleが使用されている。

○ But-if a mannes soule were in his purs; (A.Prol.656)

○ And God wisly on my soule rewe(A.Kn.1863)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*saul*(210) *saule*(5038) *saules*(1568) *saulus*(1822)

- Havelok the Dane（中東部方言）：soule(245)（1422)
- Gawain & Gk.（中西部方言）：*saule*(1916) *sawle*(1879)
- Piers the Plowman（中西部方言）：*saule*(2.35,36) soule(a.8.23) soules(a.1.121)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：*saul*(iv.1935) soule(p.453)

この*saule*、*sale*は上記の引用例によっても明白のように、英国各地の方言で共通に用いられたと考えられる。

7） sang［1例］ Sc.and north.dial. OE.sanc>sang

o Forms：11c.～ sang.song

◎ Herdistow ever slyk a *sang* er now?(A.Rv.4170)

作品内ではsongも使用されている。

o For wel he wiste, whan that song was songe,(A.Prol.711)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*sang*(87) *sanges*(23)
- Gawain & Gk.（中西部方言）：songez(1654)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：song(ii.3012) songe(i.2745) songes(i.2739)

§2 代名詞

hem(N.) them.3969 themselves.4146 *ik*(N.pers.pron)I 3867.etc
thair(N.)their 4172 *wha*(N.)who 4173
whilk(N.)which 4078

単数	人称／格	1	2	3
	名格	I (ik, ich)	thou (thow)	he she (h)it
	生格	my (myn)	thy (thyn)	his hir(e) his
	与・対格	me	thee	him hir(e) (h)it

複数	人称／格	1	2	3
	名格	we	ye	they
	生格	our(e)	you(e)	hir (thair)
	与・対格	us	you (yow)	hem

1） hem OE.him.hiom.heom>ME.hem>'em. em

o Forms: 11c.him. hiom>11c.～14c.heom.hym>13c.～14c.him
>12c.～17c.hem
>13c.～17c.am>13c～15c em>17c.～ em.'em.

In the 10th c.<u>him</u>, <u>heom</u> began in north midl. dial. to be substituted for the acc. pl.<u>hi</u>, <u>hia</u>, etc: and by 1350 <u>hem</u> had supplanted <u>hi</u> in south, also, the dative and accusative being thus identified under the form <u>hem</u>. (OED.)

◎ A doghter hadde they bitwixe *hem* two (A.Rv.3969)

◎ They soupen and they speke, *hem* to solace,(A.Rv.4146)

OE.him(＝them)はME.時代にheom,hemとなるが、これもScandinavian系のthemにとっ

て代られてしまう。このhemが 'emの形で、一般の口語や方言・俗語中に生き残っている。themはON.þeimに由来する。they-their-themがそろって用いられるのは、15c.をすぎて16c.に入ってからである。Chaucerは主格にthei,theyを用い、属格は固有のher,hire,thair（北部のみ）を使用し、目的格にhem,heom,þaimを用いている。

＊他の作品に見られる例

- Cursor Mundi（北方方言）：*hem*(308),(1703) *þam*(26) *þaim*(826) *þem*(13725)
- Havelok the Dane（中東部方言）：*hem*(367)
- Gawain & Gk（中西部方言）：*hem*(301) him(49)
- Piers the Plowman（中西部方言）：*hem*(b.3.345)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：*hemself*(p.302)

2） ik. OE.ic>ME.ik

○ Forms: 11c.～14c.ic>14c.ik
12c.～16c.ich
12c.～14c.i>14c～16c y>15c.Y>14c～ l

OE.では［ik］と発音されていたのであるが、そののちOE.後期になって［itʃ］と発音されてichが出てくる。そののちchの脱落で、iは長母音化されて［i:］となりModE.では二重母音化されて［ai］と発音されるようになった。

OE.ic remained in ME.as ic, ik in the north; in midl. and south it was early palatalized to ich. In north and midl. the final consonant began by 12th c. to be dropped before a consonant, the pronoun being in this position reduced to i; in the 14th c. ik and i were still used before vowel and consonant respectively in the north.(O.E.D)

◎ But *ik* am old, me list not pley for ages;(A.Rv.3868)

◎ And yet *ik* have always a coltes tooth,(A.Rv.3888)

作品内ではI［i:］、ich［itʃ］がみられる。

○ I am thy trewe verray wedded wyf; (A.Mil.3659)

○ I is as ille a miller as are ye. (A.Rv.4045)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：i(73) ic(1975)(808) j(25408) i self(2559)
- Havelok the Dane（中東部方言）：i(21)(167)(305)etc
- Gawain & Gk.（中西部方言）：i(24) (253)(1962)etc
- Piers the Plowman（中西部方言）：ik(b.5.228) ich(1.4)(2.41) y(4.370)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：I(iv.3622)

3） thair［1例］ON.þeira>Late ME.thair

○ Forms:13.þezzre>14c.þeire>þair>14c.～15c. thaire>15c.～ their
14c.～(Sc.)thair

このthairはON.þezzre>þeira>thairと変化して、"Of belonging, or pertaining to them"の意味に使われた北方方言である。

◎ A wilde fyr up-on *thair* bodyes falle!(A.Rv.4172)

Old Norseよりþeir-þeirra-þeimが借入されると、hi(e)-hir(e)-heom hemを序々に脅かすようになる。

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*þ*air(253) *þ*aire(386) *þ*aier(794) *þ*are(48) *þ*eir(1716)
- Havelok the Dane（中東部方言）：*þ*ere(1350) here(52)
- Gawain & Gk.（中西部方言）：*þ*ayr(1359) her(54) hor(130)
- Piers the Plowman（中西部方言）：here(ii.273)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：here(p.51)

4） wha［1例］ OE.hwa>ME.hwo(Sc.)wha

○ Forms: 11c.～13c.hwa>12c.～13c.hwo>13c.～ who.16c.～(Sc.) wha.

◎*Wha* herkned ever slyk a ferly thing?(A.Rv.4137)

今日でもScotland地方では聞かれる方言音である。作品内ではwhoが多用される。

○ Who dorste be so boold to disparage (A.Rv.4271)

○ But sikerly she myste who was who(A.Rv.4300)

○ And therefore, who-so list it nay y-heere(A.Mil.3176)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*wa*(3878) *Qua*(454)(81)
- Havelok the Dane（中東部方言）：hwo(172)
- Gawain & Gk（中西部方言）：quo(231) who(682)
- Piers the Plowman（中西部方言）：who(b.9.36)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：who that(p.13)

5）Whilk［2例］ OE.hwilc,wilc>ME.whilk>(dial.)whilk.

○ Forms: 11c.～13c.hwilc,wilc>13c.hwilh,wilch>13c.～15c.wilk>14c.～16c.(dial)whilk

12c.hwic,wic>12c.～13c.hwich>14c.～16c.whiche>14c.～which

◎ 'WHAT? *Whilk* way is he geen? 'he gan to crie(A.Rv.4078)

◎ Lo, *whilk* a compline is y-mel hem alle!(A.Rv.4171)

作品内では他に、which、whicheが多用される。

○ And whiche they weren and of what degree(A.Prol.40)

○ And which of yow that bereth hym beste of all.(A.Prol.796)

○ Foure gleedes han we, whiche I shal devyse(A.Rv.3883)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*quilk*(146) *quil*(1205) *quilke*(28299) *whilk*(25391)
- Havelok the Dane（中東部方言）：hwilkgat=which way(836)
- Gawain & Gk（中西部方言）：queper(1109)
- Piers the Plowman（中西部方言）：whiche(a.5.26)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：which(P.52) whiche(P.707) which that(i.94)

whilkは14c. 頃より地域語の形式を取るようになって、今日でもSc.Nhb.Dur.Cum.Wm.Yks地方で聞かれる方言音である。

§3 形容詞

awen(N.) own 4239	*bathe*(N.) both 4087.4112.etc
il (N.) bad,evil 4174.4184	*na* (N.) no 4026
neen(N.) no.none 4185	*slyk* (N.) such 4130
twa (N.) two 4129	*wrang*(N.)wrong 4252

1） awen［1例］OE.azen.æzen>ME.ahen>awen>(north.Sc.)awn

○ Forms; 11c.azen.æzen>13c.ahen>13c.～15c.awen>14c.～(north.Sc.)awn
12c.～14c.ozen>13c.～16c.owen>14c.～17c.owne>17c.～ own.

◎ I is thyn *awen* clerk, swa have I seel.(A.Rv.4239)

このawenは 'Used after a possessive case of adjective, to emphasize the possessive meaning.' (O.E.D)の意味に使われた北方方言形のものである。このawenは全作品中で唯1例で、owne (A.Rv.内では4例)、owneが多用されている。

○ Of yong wommen at his owene cost; (A.Prol.213)

○ But in his owene he kan nat seem a balke (A.Rv.3920)

○ As frendly as he were his owene brother; (A.Kn.1652)

○ And swoor he wolde been hir owene page; (A.Mil.3376)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi (北方方言) ： *auen*(462) *auin*(2750) *aun*(1971) *aune*(2803) ouen(389) naun(7742) nawen(17313)
- Havelok the Dane (中東部方言) ： oune(375)
- Gawain & Gk (中西部方言) ： *awen*(736) *auen*(293) *aune*(10) owen(408)
- Piers the Plowman (中西部方言) ： owen(b.10.367) owene(i.124)
- Works of J.Gower (ロンドン方言) ： oghne(p.86) oughne(i.1948) owen(viii.1248) owne(viii.2954)

ModE.ownへのOE.azenからのa＞0の音推移は、12c.頃に起った模様である。しかし北部地域では音推移は行われず、今日なお方言音として残っている。E.D.Dによるとaan,aen,ahn,ain,ane,aun,awin,awn,awneの綴字で使用されている。

2） bathe［3例］ ON.baðar>ME.bathe

○ Forms ： 12c.～13c.baðe> 12c～16c.bothe.baðe.14c.>～ both
(north)13c.～15c.bath(e).>14c.～16c.baith(e)>.14c～ baith

◎ By Goodes herte he sal nat scape us *bathe*.(A.Rv.4087)

◎ *Bathe* the wardeyn and our felawes alle.(A.Rv.4112)

◎ He mighte doon us *bathe* a vileinye.(A.Rv.4191)

このbatheは "The one and the other : referring to two specially designated persons or things, implying that two and no more are so designated, and emphasizing the fact that neither of them is excepted from the statement made; equivalent to 'the two and not merely one of them' " の意味に使われた北方方言である。作品内ではbothe,bother,bothesの用例がみられる。

○ Both of his catel and his mesuage(A.Rv3979)

○ This Aleyn al forget both mele and corn,(A.Rv4076)

○ Bothe of his propre swynk and his catel(A.Prol.540)

○ Bitwene hir bothe lawes, that they sayn(B.ML. 221)
○ Bothe hey and cart and eek his capres thre.(D.Fri.1554)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*Bath* he sette in *þare* fre will(666)——O.E.D
  bathe(28249) *þape*(1478) both(40)
  bape(11167) *baper*(1254)
- Havelok the Dane（中東部方言）：*bape*(1336) *bape*(360) bopen(173)
- Gawain & GK.（中西部方言）：bope(111)
- Piers the Plowman（中西部方言）：bope(11.8) Her botheres(3.67)＝of them
  both oure bopers(7.181)＝of us both
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：bothe(P.159) bothen(i.1829)

このbatheの文法的取扱いについては、形容詞と副詞的表現を一括して扱っている。
ME.baðeが出来るまでは、英国全土ではOE.bo＝bothが使用されていた。このBoについて少し述べる。

○ Bo [adj.pron.] OE.bezen.ba.bu>ME.bezzen.ba
○ Forms：masc.11.bezen>12c.～13c.bezzen>13c.bæien>14c.baye
fem.11c.ba >13c.boa>13c.～14c.bo>15c.boo
neuter.11c.bu

3） il［4例］ ON.illr>ME.ille

このilの解釈については、ModE.illの意味ではなく、「evil的な意味のill」の解釈をするべきである。EarlyME.よりilはevilの同義語と考えられたり、evilの変形・省略形とも考えられた。特に北方地方ではその特徴がいちじるしく、例えば、evilの母音間（eとiの間）のvは消失する特徴があって、evil>eil>il, devil>deil, even>ein, preve>pree, shovel>schoolのように、v－綴字脱落の推移をとった。この類推から、ON.よりの借入語illrがillr>ille>ilと変遷して使用され始めても、evilの語源OE. yfelは、yfel>ifel>ivel>ivil>ilとの変遷過程を取って、12c.以降もillの意味の代用語をつとめた。
ここでⓐevil ⓑill[adj] ⓒill[adv]の語源について整理しておく。

ⓐ evil OE.yfel>ME.ivel>evil
○ Forms：11c.yfel>12c.～14c.>ifel>12c.～15c.ivel>14c.～16c.evill>14c～ evil
Lothe is Eville mannys soule & body bope(Cursor Mundi,8016)

ⓑ ill ON. illr
○ Forms：ON.illr>12c.～16c. ille>14c.～16c. yll>14c.～17c. il
今日ではill health, ill humoar, ill temper, ill successなどの使用形態をとっている。

ⓒ ill ON.illa>Early ME.ille
○ Forms：ON.illa>13c.～15c. ille>ylle 13c.～ il

作品内のilとevilの用例を調べてみると、ilはA.Rv.の4例のみ、evilはA.Rv.の1例を含めて多数用いられている。

◎ I is as *ille* a miller as are ye.(A.Rv.4045)
◎ Ye, they sal have the flour of *il* ending.(A.Rv.4174)
◎ And we han had an *il* fit al this day.(A.Rv.4184)
◎ *Il-hayl*, by God, Aleyn, thou is a fonne!(A.Rv.4089)

◎ Hym thar nat wene wel that yvele dooth.(A.Rv.4320)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*il*(548) *ill*(45) *ille*(4425)
- Havelok the Dane（中東部方言）：ille(1165)
- Gawain & GK.（中西部方言）：ille(346)
- Piers the Plowman（中西部方言）：ille(11.93)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：yle(1.1578)

4） na.［adj.5例 adv.2例］

① adjective 'na' OE.na.（Reduced form of OE.nan,non,a.None)

o Forms：12c.～16c.na>naa,nea,neah,nee,ney,ne
>14c.～16c.noo>13c.～no

◎ 'Syomnd', quod John, 'by God, nede has *na* peer.(A.Rv.4026)

◎ Him boes serve him-selven that has *na* swayn,(A.Rv.4027)

◎ With empty hand men may *na* haukes tulle.(A.Rv.4134)

◎ This lange night ther tydes me *na* reste.(A.Rv.4175)

◎ There nas *na* moore; hem neede no divale(A.Rv.4161)

② adverbial 'na'［2例］ OE.nā

o Forms：11c.～16c.na>18c.～19c.(Sc.)nae

Normally *nā* in northern ME. and Sc.,and *nō* in Midland and Southern dialects.(O.E.D)

◎ Oure corn is stolen, shortly, it is *na* nay.(A.Rv.4183)

◎ But yet, *na* fors; al sal be for the beste.(A.Rv.4176)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*na*(16) *nai*(1238)
- Havelok the Dane（中東部方言）：na-more(2363) na more(2530) no(518)
- Gawain & GK.（中西部方言）：nay(256) no(336)
- Piers the Plowman（中西部方言）：na(14) namore(b.3.108) nai(a.6.47)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：no(P106) nomore(a.11.1526) nomo (P.1086)

5） neen［2例］ OE.nan

o Forms：11c.nan>12c～14c.Sc.15c～16c.(north 19c.)*nan.nane.naan.neen*
12c.～ 16c.non 15c.～ none

◎ And sin I sal have *neen* amendement.(A.Rv.4185)

◎ By Goddes saule,it sal *neen* other be !(A.Rv.4187)

このneenはModE.noneの意味に使われたnorthern ME. dialectである。作品内ではnoon,non,nooneなどが多用されている。

o A better preest I trowe that nowhere noon ys.(A.Prol.524)

o Ageynes his myght ther gayneth none obstacles(A.Kn.1787)

E.D.Dによると、neenはYks.Abd.Nhb.の北方地方で話されている。

o *Neen*,*neen*,—jist sax i' the ane an' half-a-dizzen(Abd.)

o Thous *neahn* deef.(Nhb.)

o He'll *neean* ho'd back.(n.Yks.)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*nan*(54) *nane*(688) *nain*(1968) non(248)
- Havelok the Dane（中東部方言）：non(518) nan(2200)
- Gawain & GK.（中西部方言）：non(e)(307)
- Piers the Plowman（中西部方言）：non(4.437) none(7.434)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：non(P.207) none(P.201) no(i.137)

6） slyk.［4例］ ON.slik-r>Late ME.slike

such: OE.swilc,swelc 13c.～ such 13c.～15c. succh.

swilk: northern unpalatalized form 13c.～15c.swilke.

slike: ON.slik-r>14c～15c. slyk.slic.>14c.slik.sli.

◎ *Slyk* as he fyndes, or taa *slyk* as he bringes(A.Rv.4130)

◎ Herdestow ever *slyk* a sang er now?(A.Rv.4170)

◎ Wha herkned ever *slyk* a ferly thing?(A.Rv.4173)

次の用例のwhilk(A.Rv.4171)は、北方地方で話された、swilk、、swile、slyk、slikなどの綴字の違いから生じた北方方言*swilk*の変形と考えられる。suchの意味に使われたものであろう。

◎ Lo, whilk a compline is y-mel.(A.Rv.4171)

作品内ではswich、swiche、such、sucheが多用される。

○ And bathed every veyne in swich licour.(A.Prol.3)

○ For to deelen with no swiche poraile.(A.Prol.247)

○ Was nowher such a worthy vavasour.(A.Prol.360)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*sli*(66) *scli*(114) *slic*(14368) *slik*(4374) *slike*(4371) *Suilk*(77) *swilk*(6258) *squilk*(3264) *suilk*(842) *suilkin*(857) *suilkins*(18064)
- Havelok the Dane（中東部方言）：suilk(644) swilk(1118) slike(1157)
- Gawain & GK.（中西部方言）：such(92) seche(1543)
- Piers the Plowman（中西部方言）：swich(1.64) swiche(R.4.2)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：swich(v.377) swiche(iv.1429) sich(viii.1110) swich(ii.566) suche,swiche(P.233.299) such(P.735)

7） twa［1例］ OE.Sc.twa>ME.twa

○ Forms：11c.14c.～15c.Sc.tua>11c.～15c.dial.twa>15c.～ twa 13c.～ two 14c.～17c.tuo.twoo

◎ I have herd seyd, man sal taa of *twa* thinges.(A.Rv.4129)

このtwaは"The cardinal number next after one"の意味のNorthern Dialectである。Sc.Yks.Lan.Nhb.地方では twa、twae、tway、twe、twea、twee、tweeah、tew、tooの方言綴が見られる。

作品内ではtwa(A.Rv.8例)、twain、twey、tweye、twoo、などが多用されている。

○ A fewe termes hadde he, two or thre,(A.Rv.639)

○ While I lyn in hir armes twoo.(RR.2594)

○ Than that the person gat in monthes tweye;(A.Prol.704)
○ Til that deeth departe shal us tweyne,(A.Kn.1134)
○ And ofte that whan twey men han everich(B.NP.4380)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*tua*(308) *twa*(29030) *tuai*(12699) *tuain*(4032) *tuin*(417)
- Havelok the Dane（中東部方言）：two(128) twayne(962)
- Piers the Plowman（中西部方言）：tweye(6.135) tweyne(b.5.32)
- Gawain & Gk.（中西部方言）：two(128)(770)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：tuo(P.336) tweie(P.18)

8） wrang［1例］ ON.wrangr>OE.wrang.

○ Forms：11c.～15c.16c.～(Sc.and north.dial)wrang
13c.～wrong 13c.～16c.wronge

◎ 'By god', thought he, 'al *wrang* I have misgon';(A.Rv.4252)

このwrangは'wrongly'の意味に使われたnorthern Dialectである。作品内では、これ以外はwrongである。

But we goon wrong ful often trewely:(A.Kn.1267)
Of hem that hadden wronge suspecioun.(B.ML.681)
Thou shalt have al right and no wrong heere.(C.Doc.174)

＊他の作品に見られる例；

- Cursor Mundi（北方方言）：*wrang*(15448) *wranges*(6447) *wrangwis*(837) *wrangwise*(28773) *wrangwys*(28101)
- Havelok the Dane（中東部方言）：wrong(72)
- Gawain & GK.（中西部方言）：wrang(1494)
- Piers the Plowman（中西部方言）：wrong(a.7.162)
- Works of J.Gower（ロンドン方言）：wrong(ii.2391) wronge(iv.3709)

Ⅳ. 結 語

作品の登場人物AlanとJohnというCambridgeから来た北国生れの学生達の会話を眺めて来た訳である。ここで彼等の話す北方方言は、現実にしゃべられているものの実写ではない。北方方言の特徴を捉えた作者のするどい言語感覚によって再現された効果的表現技巧としいの方言描写を見て来たのである。文学作品を研究する上において、登場人物の喋る方言を見すごすことは出来ない。作中の人物の思想を知ろうと思えば、その人物の言葉にたよるしか仕方がないからである[11]。方言が作者の意志に従って選ばれ使われるものである以上、また目立たぬところは標準語ですませ、特別なところだけ方言を使うこともある以上、作品に地方色を与えようとする時、もっとも現実的な方言を用いると考えられる以上、我々は文学作品で表現されている方言そのものを、登場人物ひいては作者の思想を知る上からも安易に看過することは出来ないと考えられる。

注

1．本稿の引用文は、すべてSkeat.W.W.ed; *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* (Oxford, 1972)版による。文中のイタリック体は北方方言綴りを示し、末尾の（　）内の数字はページ数を示す。

2．西脇順三郎訳。「チョーサー」（筑摩書房,1967）、p.54参考

3．Whitelock, D. *The Anglo-Saxon Chronicle*(London,1961)p.51

4．廣岡英雄『歴史的に見た英国民の言語Ⅰ』（篠崎書林,1969）p.23を参照する。

5．Potter.S　*Our Language* (Penguin Books,1966),p.36

6．*Canterbury Tales rendeted into Modern English* by J.U.Nicolson,etc
以下、本稿の現代英訳文は、すべて、この版による。(The Programmed Classics,1934)p.1

7．Wyld,H,C.　*The Historical Study of the Mother Tongue* (Haskell House,1968)　pp.216-249 pp.250-298

8．山本忠雄　『標準英語の出来るまで』（三省堂,1937）pp.1-7を参照する。

9．桝井迪夫　『チョーサーの世界』（岩波新書,1976）pp152-170を参照する。
物語に多用性と立体性を与えるために、桝井氏はすべての物語を10の「物語群」に分けて、物語が物語を生むためのグループ分けを行っている。その編集を紹介する。

物語群Ⅰ～「総序の歌」「騎士の物語」「粉屋の話の序」「粉屋の話」「家扶の話の序」「家扶の話」「料理人の話の序」「料理人の話」

物語群Ⅱ～「弁護士の前のつなぎ」「弁護士の物語の序」「弁護士の物語」

物語群Ⅲ～「バースの女房の序」「バースの女房の話」「托鉢僧の序」「托鉢僧の話」「召喚吏の序」「召喚吏の話」

物語群Ⅳ～「学僧の序」「学僧の物語」「貿易商の序」「貿易商の物語」

物語群Ⅴ～「近習の前つなぎ」「近習の物語」「郷土の序」「郷土の物語」

物語群Ⅵ～「医者の物語」「免罪符売り場の前つなぎ」「免罪符売りの序」「免罪符売りの話」

物語群Ⅶ～「船長の話」「尼僧院長の序」「尼僧院長の物語」「トパス卿の序」「トパス卿の話」「メリベウスの序」「メリベウスの話」「修道僧の序」「修道僧の物語」「尼僧附僧侶の序」「尼僧附僧侶の物語」

物語群Ⅷ～「第二の尼僧の序」「第二の尼僧の物語」「錬金術師の徒弟の序」「錬金術師の徒弟の物語」

物語群Ⅸ～「賄方の序」「賄方の話」

物語群Ⅹ～「教区司祭の序」「教区司祭の話」「チョーサーの取消し文」

この物語群Ⅰ～Ⅹの配置に対して、Chaucer全集を編集したイギリスのSkeat.W.W氏はGroupA～Ⅰの９つの群に分けＡ－１の順に並べた。

物語群	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
Group	A	B^1	D	E	F	C	B^2	G	H	I

Chaucerは往きと帰りに２つずつの話を巡礼者にさせて、全部で120もの話を創作していた。この壮大な構想は遂に実らなかった。成功しておれば、上の表はどのように変更されたのか興味深い。

10．各章（§１～３）の最初の引用語群は、以下の基準に従った区分けである。*banes*（北方方言音綴り）:N＝Northern word:4073（Skeat版のファブリオの行数）

11．廣岡英雄『方言研究の意味するもの』（関西大学文学論集第10巻４号,1960）pp.60-81を参照する。

参考文献

Tatlock and Kennedy *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer.* (Peter Smith, 1963)

Pei.M. *The story of Language* (George Allen and Unwin, 1965)

Clark.J.W. *Early English* (Andre Deutch, 1957)

Ellis.A.J. *On Early English Pronunciation with especial reference to Shakespeare and Chaucer* (Haskell House, 1969)

Bradley.H. *The Making of English* (Macmillan, 1955)

Wyld.H.C. *A History of Modern Colloquial English* (Blackwell, 1956)

Brunner, K （厨川文夫訳） 『中世英語文法概説』（研究社, 1966）

廣岡英雄 『英文学の方言』（篠崎書林, 1965）

Brrok.G.L. *English Dialects* (Andre, Deutch, 1963)

Baugh.A.C. *A History of English Language* (Appleton-Century-Crofts, 1963)

武居正太郎 *Chaucer, The Reeve's Tale*（文化評論, 1975）

御輿員三訳解 『キャンタベリー物語序歌訳解』（南雲堂, 1975）

Wright.J *The English Dialect Grammar* (Oxford, 1968)

ibid, *The English Dialect Dictionary* (Oxford, 1970)

The Oxford English Dictionary (Oxford, 1961)

略語表

（下記のイタリック体は作品名および用語名を示し、ローマン体はその略語名を示すものとする）

A.Prol.	*Prolog of the Canterbury Tales*		
A.Kn.	*Knight's Tale*	F.Sq.	*Sqire's Tale*
A.Mil.	*Miller's Tale*	F.Fkl.	*Franklin's Tale*
A.Rv.	*Reeve's Tale*	G.SN.	*Second Nun's Tale*
A.Co.	*Cook's Tale*	G.CY.	*Canon's Yeoman's Tale*
B.ML.	*Man of Law's Tale*	H.Mcp.	*Manciple's Tale*
B.sh.	*Shipman's Tale*	I.Pars.	*Parson's Tale*
B.Pri.	*Prioress' Tale*	OE.	*Old English*
B.Th.	*Tale of Sir Thopas*	ME.	*Middle English*
B.Mel.	*Tale of Melibeus*	ModE.	*Modern English*
B.Mk.	*Monk's Tale*	O.E.D	*Oxford English Dictionary*
B.NP.	*Nun's Priest Tale*	CT.	*Canterbury Tales*
C.Doc.	*Doctor's Tale*	Gawain & GK.	*Sir Gawain and Green Knight*
C.Pard.	*Pardoner's Tale*	Wm.	*Westmoreland*
D.WB.	*Wife of Bath's Tale*	Yks.	*Yorkshire*
D.Fri.	*Friar's Tale*	Lan.	*Lancashire*
D.Sum.	*Sumner's Tale*	Der.	*Derbyshire*
E.Cl.	*Clerk's Tale*	PF.	*Parliament of Fowls*
E.Mch.	*Merchant Tale*	BD.	*Book of the Duchess*
Bo.3.	*Boethius, bk.3*	O.E.D	*Oxford English Dictionary*
E.D.D	*English Dialect Dictionary*	O.N	*Old Norse*
Dial.	*Dialect*	R.R	*Romaunt of the Rose*
Nhb.	*Northumberland*	Dur.	*Durham*
Cum.	*Cumberland*	Wm.	*Westmoreland*

Summary

In fact, it is only towards the end of 14th century that we see the language of London—the language of great poets like Chaucer—assume throughout the country the form of a common written and literary language. Roughly speaking five varieties, five dialects of Middle English can be distinguished geographically : (I) South-East Kentish, (II) South-West Southern (III) East-Midland dialect (IV) West-Midland dialect, finally (V) the Northern dialect, which extends up into Scotland. London Dialect is contained in (III) East Midland Dialect. Taken as a basis for description, the language of Chaucer would give a very inexact idea of the variety of forms and sounds.

The aim of this essay is to show, as accurately as possible, the pronunciation, grammar and words of the Northern Dialects used by Chaucer in his literary works. It is needless to say that Chaucer is one of the great authors that England has ever had, and his works have a large reading audience in the world. Without some knowledge of the dialect which Chaucer introduced in his novels and poems, his art of literature would not be fully appreciated.

In this eassay, we could find the Northern dialectal forms, *I is, Ik am, twa, hem, thair, wha, whilk,* etc. We also try to appreciate the fun of 'fabliau' using the Northern Dialects. We must find Chaucerian irony and humour in this fabiau.